

二葉亭四迷の恵み（一）

●二葉亭四迷……くたばってしめい

二月二十八日午前九時五十分、浅間山荘突入、銃撃戦。その後は十四名のリンチ殺人が暴露された。そのちよつと前の二月初旬には、スケートのジャンネット・リンちゃんの可愛い健康な色香を楽しみ、金銀銅を独占したジャンプ日本人三選手に拍手喝采。連合赤軍を撲滅するためになだれ込んだ三十名の機動隊にも拍手喝采。テレビ中継が主役の時代は円熟に向かっていた。すなわち一九七二年、昭和四十七年。四月中旬、札幌大学の入学式が緩行に敢行されたが、誰も知らない。

入学式が終わり、「昨日の狸小路のビヤホール、浅草のアサヒ・ビヤホールよりも重厚で味がある。いいね。あした帰るが今夕は何処にするか」と親父は言った。結局のところ、薄野十字路のビルの三階にある月桂冠の直営店に決めた。開店は五時からなので豊平川を見に行く。「札幌の街はすがすがしいライトブルーの色彩だな。やはり松浦武四郎は押さえておくべきだろう。せつかく四年間ここに居るのだから。あとはアイヌ思想だろう。清潔、素朴なアニミズム。名もなき山巒、小さな谷間、川の石ころにまで神様が居るのだから」。

川面から吹きあがる風はまだ冷たい。「ここから飛び降りたのか」「場所が違うが普請中の鉄橋からだよ」「普請中か。鵬外だな。今も日本は普請中か。しかしよく死ななかつたものだ。ホテルに煙草を忘れた。中

粕谷 隆夫

島公園を散策して、五時ジャスト、店の入口でな」

すなわち泡鳴岩野美衛のことである。わたくしが岩野泡鳴を知ったのは、高校の図書室での本の目次から、【毒薬を飲む女】という作品名が目飛び込んで来たからである。『なんだこれ』。読んだら面白かった。もちろんすぐに泡鳴という作者を調べるが、小説よりもさらに面白い人物である。脳髓の容積大で、死後、東京帝大病院に保存された三人、漱石、桂太郎、そして泡鳴。

北海道ロマンは独歩、啄木が筆にしたが、泡鳴は資本家を夢見て樺太でカニ缶詰工場の経営を計画し、親の残した家屋を抵当に金を作り、「アメリカにカニを輸出するのだ」と大声をあげた。一九〇九年、明治四十二年の事である。また樺太に行けば、東京に残した腐れ縁の増田しも江とも縁が切れそう。泡鳴は酒好き女好きだった。「自分にとって女は米の飯のように必要だ」。そして女性に対しては当たるを幸いすぐ行動を起す。しかしこういう言葉も残している。「どうして俺に限って、めぐり逢う女が皆まづいのだろう」。

数字への緻密な感覚と、それを基とした冷徹な計画を持たない事業は成功しない。六月二十八日、日本領になって四年目の真岡に着いたとき、すでに漁期は終わっており、資金を投入した従弟の工場は放漫経営。結局、真岡の宿と料亭に借金を残し、札幌まで敗走した。ただ彼はカニ缶詰工場の経営よりも、ロシアとの国境まで探検したりして、国家の肥大

と自我の肥大が一致し、自分の『強者の思想』を再確認する。「観じ来れば、優強者が弱者を吸収しつつおのれを發展したところに文明もでき、国家もできる」。このあたりから、西洋文明への憧れと影響から英語の教師になった彼が、超人思想の虜になっていく。起爆剤はもちろん日露戦争である。十月二十六日、伊藤博文がハルビンで暗殺された事件は彼に衝撃を与えた。文人と知られた彼は、翌日、北海中学の学生の前で講演をおこなった。「わが国の将来は、欧米の偽文明を排し、実力を尊ぶ野蛮主義にかかっているのだ」。体に悪いですから先生もつと小さな声で心配した教師の助言をよそに、ますます高ぶった彼はひとり興奮し、ついに「おれは宇宙の帝王だ！」と叫ぶと、満場の学生たちはドツと笑った。さらに「いや、宇宙そのものだ！」とつづけると、またまたドツとくる。学生とは今も昔もこんなものである。

「きさまみたいな出来損ないは、親のところで産みなおしてもらえ」と容赦なく教室で怒鳴り散らす男であったが、授業は明快、また冗談を言つて笑わせるので、大倉商業高校の英語教師時代の泡鳴は生徒に人気があった。生活費のため夜学部でも教えていたが、授業の前に飲んだ酒が暖かい教室で体にきき居眠りをしたり、酔っぱらつて芸者と歩いているところを生徒に見られて首になりかけたりした。「校門を一步出たら、もうおまえらと俺とは見ず知らずの他人である。従つて、外で出会つても俺は知らん顔をする。おまえらもお辞儀する必要はない」と芸者事件のあとと言つた。口々に生徒たちも言う。「煙草を飲んでいてもいいですか」「酔つていても叱りませんか」果ては「芸者を連れていてもかまいません

んか」とくる。生徒たちがみんなで騒いでいると、頃を見計らつていた泡鳴が「黙れ、ここは神聖な教場である」と叫ぶ。生徒たちはまたドツと笑うのである。

樺太から、夏に札幌に帰つて来た泡鳴は、地方新聞の依頼で日高地方へ旅などもしていたが、東京で仲秋、こちらでは晩秋の十月十六日、増田しも江が札幌駅に現れた。彼にうつされた淋病の治療費を取りに来たと言つているが、とにかく押しかけて来たのである。半月の時間、それは圧縮の時間。女を厄介払いできるなら、自分を厄介払いすることを厭わないのが泡鳴。十月三十一日の夜更け、突如ふたりは心中する気になり、郊外の豊平川まで歩き、水害で折れた鉄橋の先端から闇夜の中に身を投げたのである。ところがここは北国札幌、新雪がたつぷりと積もつていて無事。正気になった泡鳴はしも江を背負い街に帰るが、彼女は、飛び降りた拍子に無くした櫛のことを性懲りもなく何度もぼやくのであった。女とは今も昔もこんなものである。(青鞥にフェミニストに殺されるかな)。

漱石は文部省による博士号授与を黙殺したが、堂々と要求したのは泡鳴である。彼は明治という膨張する時代のひと、そのものである。見栄や気取りというけち臭い近代人に生まれた毒素はまったくなかつた。「自分は蛇を好む。蛇が直立したのが人間だ」。この言葉に正宗白鳥は答える。「泡鳴は、才気は乏しかったが物事を誤魔化そうとはしなかつた。頭脳は不聡明であつたが、読者に媚びようとはしなかつた」。

豊平橋から定山溪の彼方を見ていたわたくしは、「一首の歌の平安、作

者不明の平家、太平記、江戸期の様々な作品、そこでは創作の面白みが充溢していた。その後、金色夜叉の硯友社が衰退して以降、日本の作家は、作品よりも作家自身の方が前面に出て来るようになったのは何故か」という小林秀雄の言葉を反芻していた。『作家自身が文学作品か』と無い頭で考えていました。その時、後ろでせき払いがした。振り向くと夕景が一瞬セピア色になり、空間がゆがんだ。ソフト帽を頭に載せ、黒いマントを着た大柄の男が立っていた。そして低音でゆっくり口を開いたのである。

「泡鳴君は気立てが良い、面白い男でしたよ」「え！」「ぼくの渡露送別会に来てもらいました」「え、ぼく？」「いやいや失礼、二葉亭四迷のロシア行きの時です」「ああ、上野精養軒ですね」

この男は一語一語探しながら、ゆったりとした口調で話しかけてきた。君は四年間ロシア語を学ぶのかと聞いてきたので、入学式の後のオリエンテーションで、紳士然とした学科長のK先生が、開口一番、ロシア語では食っていけないと話し出したので驚いたと言ったら、声を出して笑った。「君の目的は」「ドストエフスキーを読み込みたいのです」「ダストエフスキーか」。その発音にビックリした。チャイコフスキーとチコフスキーである。「露和はなにを使う」「岩波の八杉です。全員買わされましたよ」「彼は八杉君の留学に反対したのだ」川面からの風はピタリと止まった。車の騒音を避けるため土手を歩くことになったが、嫌味な感じはなく、ロシア文学の先達だった二葉亭のことを話し出したのである。

「ダンチェンコは文人としては二流だが、ジャーナリストとしての見

識は広がったほうです。彼の来朝がきっかけで、東京朝日は二葉亭をロシア特派員にしました。ペテルブルグへの途次、敦賀でロシアから帰朝した後藤新平と会いました」。男はしばらく藻岩山の遠い彼方を見ていたが、急にわたくしの目をのぞき込み「後藤は大物でしたね」と呟いた。そして自分の足元に視線を落としながら歩き始め、話を続けたのであります。

「君は二葉亭の作品をどう見ます」「言文一致は画期的です。やはり浮雲ですかね。小説の筆が心理という世界に向かった最初の作品だと鵜外が言っていますし、白鳥は当時の社会相を描き切っていると述べています」男は後ろに首を反らした。「文三も昇も形を変えて現代に生きていますよ。模索そのものが大きなテーマですし、近代文学を支える原動力になったのではありませんか」「いやロシアの小説を読んでいると、作家に主張のない人はいないし、著作そのものに目的がある。というか、それから逃れられない感じなのですよ」

ずいぶん丁寧な口調なので、こちらは少し気味悪くなってきた。「二葉亭はすべてにおいて不完全でした。文学を求める者たちには、文学のどこに意味があるのだと詰め寄り、文学を否定する者たちに対しては、文学は命がけでやるべきものだ。我々が見失ったものは何か、それは我々自身じゃないのか。二葉亭は失意のひと、失敗のひとを刻印させ、運命づけられた男だったのではないのか」。

この男、自分自身に喋っているのか。

「川上眉山は自殺しました。文士生活は嫌なものです。ぼくにとって

切実ないかに生きるべきかは、他人にとつてのいかに生きるべきかと重なるのですかね。不安です。文章を書いていると、書き手にとつての人生なのか、読者にとつての人生なのか、判らなくなります。明治という扉が開いたら、今までのものがすべて消えて、新しく始めるという大命題を身に着けた。じゃあ、どうやって生きていこうとなった訳です」。

「考えなければいいじゃないですか」

「そう考えないことですよ。しかし考えたい人にとつては、考えたい問題なのです。君は面白いね。考えないのなら大学へ行く必要などないじゃないか。あなたはインテリゲンチヤがロシア語であることを知っていますよね。すなわち知識人」。

「結果的に、しつぽは犬を振れませんよ」

男はまた目をのぞき込んできた。「君は変わり者だね」。目と目がぶつかりそうになって、初めてこの男がド近眼であることに気が付いたのです。

「あまり皮肉は言わないことです。この四年間は大切なときですよ。

君の人生がかかっている。素直さを胸の内に秘めていたまえ。それと、松原岩五郎の『最暗黒の東京』と、横山源之助の『日本の下層社会』は必読です。小説なんかよりもね。しかし、大人に対する畏れが無くなってきている。これは大人にも責任があるが。まじめなものになんて意味があるのだというベクトルが強くなってきている。明治人の二葉亭はそのことを予見していると思いませんか。大人になるときの通過儀礼がないのだ。まあ、自分であることの実感からしか入れない。『分かる』とい

うこと自体、それが基本です。また会いましょう。今度会う時は、ドストエフスキーとは何か、一言で云ってください。正しいか正しくないかは浅薄な事です。君自身が表出できればそれで良いし、ドストエフスキーも無論それを望んでいる。それが本物の作家です」。

翌日、わたくしは札大図書室に朝一番に飛び込んだ。カウンターの司書の女の子に……可愛い……なんだか水晶の珠を香水で暖めて、掌へ握ってみたような心持（あれ、坊ちゃんのマドンナの表現だ）。「どこのお生まれです」（しまった、ふるさとと聞くべきだった）「瀬棚です」「あの有名な」。彼女は柳眉をあげたが、それがまた最高。「生まれて初めて有名なという言葉聞きました」。

借り出したのは、中村光夫『二葉亭四迷伝』、内田魯庵集、逍遙書簡集、四迷の『子が半生の懺悔』である。K先生がおっしゃる通り、基本的文献である。

その後、男はロシア語劇の練習場所に現れたり、その他、四年間に何回か会って話すことになる。彼は、生活上の緊張感、そして志の高さを失うなど助言していくのであります。